

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Φ・M・ドストエフスキーにおける「手記」形式作品の自己言及性について:『未成年』、『作家の日記』 試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sakanaka, Norio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1848">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1848</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 博士論文審査の要旨

坂中紀夫の本論考はドストエフスキーの仕事の中でも特異な位置を占める『作家の日記』を野心的な視点から捉え直そうとした試みである。『作家の日記』は一種の個人新聞に定期的に発表された「日記」であり、いわゆる死後刊行の”プライベート日記”ではない。その目的も単なる日録ではなく、日々の現実だけではなく読者の応答を巻き込みながらその”中空に”雲のように生成する、言わばインタラクティブな「運動・生成そのものとしての作品」であろうとする特異な意図をもった試みだった。坂中氏はそうした視点から『作家の日記』をノンジャンルな「日録・覚書」の集成ではなくドストエフスキーの斬新な「全体小説」の試みであるとして、その独特の形式的特性を鮮明にしようとする。その中で、ドストエフスキーの長篇の中でもこれまた捉えづらい’失敗作’とされる場合の多い『未成年』と『作家の日記』を対照しつつ、「小説作品」を「書き手-作品」の回路から「複数のものによって書かれる多主体性」へと向けようとしたドストエフスキーの意志を鮮明化し、それを明確な構図の中に提示した本論考の重厚さ、坂中氏の批評精神の力量の確かさは審査委員の中からも高い評価が述べられた。一方、その形式化のために援用される「探偵小説的形式」「自己言及性」というものの規定に関しては、より深く練り上げられるべきものとして幾つかの疑義が呈されたが、それはこのような野心的視点を得た坂中氏が研究者として今後引き受け展開すべきものだろう。坂中氏の実力は必ずやそれを担い充実し得る研究者としてのメチエを手に行っていることを審査員は総意として認め、ここに上記の論文成績および評価として審査報告と致します。

## 論文審査結果

ドストエフスキーには『死の家の記録』から『作家の日記』に至るまで「手記物」と呼び得る作品群がある。この形式自体はゴーゴリ等にも見られる近代小説の一形式とあってよいだろうが、ドストエフスキー後期の「手記物」にはかつて無い独創的な試みがあると思われる。本論考はその試みのもっとも野心的な成果『作家の日記』に焦点を当てつつ、これもまた作品自体の独特な未完成感によって彼の主要作の影に置かれて来た長篇『未成年』を、その、見方によっては平凡とも唐突とも見える自己言及的構造において、『作家の日記』の野心的企画との連関を示すことが主題となる。

本論は四章からなり、第一章では「手記」という文芸形式を「探偵小説」というジャンルとの比較によって独特の視点においてとらえようとする坂中氏の主導主題が提起される。例えば探偵小説において「犯人の手記」という形式で書かれる作品の場合に生ずる、筆者＝探偵1、読者＝探偵2、手記の「書き手」？＝犯人？、という単純なようでいて複雑な「主体混乱」に見られる「自己言及的ループ」をトリック問題から切り離して、ドストエフスキーが選んだ『作家の日記』の、筆者＝書き手？、読者＝読み手？＝書き手？という

特異な循環形式と対比し、そこに『作家の日記』が同時代の他の「日記・手記形式物」とは異質の、書き手と読み手を複雑に入れ子にした自己言及的インターフェイスそのものを主題的に持つ企画だと見なす坂中氏のテーマが簡潔に記述される。

第二章では『未成年』の、延々と続く「僕＝未成年」の「手記」、その最後に不意に、「その手記を読んで総括を行う或る他者＝大人」の見解が置かれるという、例えば『ウェルテルの手記』や日本では谷崎『瘋癲老人日記』等にも似た手法が見られる二重構造が、ドストエフスキーに於いては「未成年＝未完＝宙吊り」を作品そのものにおいて顕在化させようとする意外に複雑な構造的企みを含んでいることが提起される。ここまでの章こそが坂中氏の論文の主題の冒険的とも言える提起であり、その説得性を承認するか反論を準備させるかの議論の分かれる所だが、ここに示された坂中氏の意図の果敢さと、難問論証のために示された該博な文献博索、思索のダイナミズムはいい意味での野心性とそれを裏付けようとする慎重さが示されたスリリングな論考となっている。

第三章は第二章で示された『未成年』と『作家の日記』との構造的鏡像関係が詳細な比較によって示される。第四章ではその比較によって示されたものが最終的に『作家の日記』ではどのような地点にまでその複雑さを起動させ機能させられるに至っているかが記述される。この第三章、第四章はその記述の詳細さ、坂中氏の研究者としての大胆さと繊細さがいかん無く示された力篇

であり、かりに前二章の「自己言及的構造＝探偵小説性」という仮説に多少の疑義を持つ者でも、この二つの章において示される坂中氏の記述、その手腕が、『未成年』『作家の日記』という、ドストエフスキーの中でも特異な「傍系作」として扱われて来た作品を巡る、近来稀に見る重厚かつ正当的な詳細慎重な読解の実力の高さにおいて示されていることを認めさせるに充分である。最終章は文字通り全体の論考意図の再認と来るべき研究の可能性を示すことで閉じられる。以上、様々な問題点を含みながらも、或いはそれ故に、本論考は近来のドストエフスキー研究

史の中でも注目すべき新しさと野心、研究者としてのメチエを示した力篇であることが認められる。

## 最終試験結果

坂中紀夫氏の博士論文に対する最終口頭試験は1月28日午後2時より神戸市外国語大学、指定試問室にて二時間強に渡って実施された。試験官は以下の通り。

- 国松夏紀教授（桃山学院大学・教養学部・ロシア文学）
- 清水教授（神戸市外国語大学・ロシア語学科・ロシア文学）
- 北見准教授（神戸市外国語大学・ロシア語学科・ロシア文学）
- 丹生谷教授（神戸市外国語大学・国際関係学科・文化芸術論）

試験は丹生谷が進行司会・取りまとめを担当し、ロシア文学・ロシア学専門研究者の立場から清水・北見・国松の順で各氏がおのおの約30分の持ち時間で、提出論文に対する

論評、質疑の形式で行った。

1・清水教授はまず坂中論文の全体の読み込み、概要を独自に詳細に纏めた後、坂中氏の論考がドストエフスキー『作家の日記』及び『未成年』に対して行った比較解釈の新しさ、論考の研究論文としての研究態度・方法・完成密度に対して高い評価を述べた後、問題点として、「探偵小説的構造」「自己言及構造」という坂中氏の解釈の中心主題に方法的な脆弱性、恣意性が多く指摘し得る点を疑義として提起した。坂中氏は自説を再度詳細に説明し、幾つかの方法的脆弱さに関してさらに深められた視点を示しつつ、清水教授の指摘部分を今後の自身の研究主題の要点として明確に理解し、応答とした。

2・北見准教授は、坂中論考のドストエフスキー研究としての冒険的新しさ・果敢さ、完成度の高さを認めた後に、しかし当該論考が「探偵小説の自己言及的性格」という前提そのものが笠井潔等の実作者・研究者の概念規定を無批判で前提として用いられたことの脆弱さ、さらにその前提に引きずられてドストエフスキー理解を前提に合わせるという倒錯が論考に生じていまいか、という厳しい指摘を行った。対して坂中氏は再度自説を討議の形で北見准教授に提起し、実り豊かな議論が行われた。ここでも坂中氏が自説の優位点と同時に脆弱さを研究課題として明晰に自覚していることが示され、研究者としての将来性に強い期待を抱かせるものとなった。

3・国松教授は坂中論文を御自身が『作家の日記』を巡って現在行っている独自の研究主題と照らして多くの示唆と読む感動を与えられたことを述べられた後、ここでも清水・北見両氏とに共通する脆弱さを質しられた。すでに坂中氏の立場が前記の質疑で明確にされていることを承認した上で国松教授はその脆弱さがむしろ今後ドストエフスキー実作との新たな取り組みの中で柔軟さをまし、坂中氏の研究者としての独自性、その研究の新鮮な将来性を持つことを期待するとして、坂中氏を励まされた。

上記の通り、坂中論考の研究論考としての完成度の高さ、斬新さ、一方でその冒険性故に見逃し難く感じられる問題点が指摘されたが、その全体に関して坂中氏が明確な展開の見取り図を持ち、「未来に向けた現在進行形の研究者」として、原典、先行研究の読解等の能力においてすでに研究者の優秀なメチエを自己のものとしていることが示された。試験官は試験後合議し、坂中氏およびその論考が、豊かな学的討議に値する完成度と展開性を持ち、博士論文として充分評価に値するその優秀さを合意し、「合格」という結論に達した。以上、報告いたします。